

深澤 賢治著

『陽明学のすすめII』

中里 麦外

『陽明学のすすめ』は、全十巻という壮大な構想のもとに書き進められている。平成という困難な時代を拓く啓蒙の書あるいは予言の書としての本シリーズの全貌は、いずれ明らかとなるであろう。

もの、御本人の述懐とほれ話、健康法、弟子の方々、干支学、旧百朝集、新編百

蘇る安岡正篤の六中観

本書は、王陽明の「技本

朝集、吟味同機、陽明学)、

「六中観」(概観、六中観

私観、六中観の詩、意訳の

巻に続くもの。その構成

詩)の二章を本文とし、さ

は、「安岡正篤の人物像」

らに附録(「新編百朝集」

(人物像、後世に残された

で割愛された『終戦前後百

朝集(四十六篇)、参考文

献・安岡正篤先生略歴で成

書評

っている。

また、序文(安岡正泰)、

推薦のことば(坂本担道)、

跋文(荒井桂)といった文

章が本書に花を添えている

が、これらは、いわば安岡

正篤とその人に私淑した深

澤賢治について書かれた資

重な歴史的文献としての価

値がある。

本書の特長は、さしあた

って三つある。一つ目は、

学問と生活が一体となった

安岡正篤の人物(人格)を

直接資料で浮き彫りとした

こと。二つ目は、戦後の日

本民族の魂を導いた『百朝

集』や『新編 百朝集』の

成立を明らかにしたこと。



三つ目は、安岡哲学の根幹をなす六中観(死中有活、苦中有楽、忙中有閑、靈中有天、意中有人、腹中有響)と激しく感応道交した著者のいわば新しい読者人格のしんじつが、平明かつ具体的に語られていること。

安岡正篤の六中観は、かつて敗戦にうちひしがれた人々の心に大きな灯りをともした。いま、その六中観は、深澤六中観としてあらたに蘇り、困難な時代を生きる私たちに深く力強いメッセージを伝えてくれるのである。

(群馬社会福祉大教授・文学博士) ◇ 『陽明学のすすめII』は明德出版社から、一九〇〇円